

## ウェストクラウン：黄昏の街

8世紀の間、シェリアックス人にとってウェストクラウンは文明の稜堡であり、また国家の強さの象徴であった。この都市はアローデン信仰の中心でもあり、そのためシェリアックスは国を挙げて、アローデンが次に定命の世界に下ったときに住まうのは、この“九つの星の都”において他にないと信じていた。“即位の時代”の間、ウェストクラウンはアブサロムと、巡礼の目的地としての人気を競っていた。しかし、アローデンの突然の死と共に、かつては輝かしかった“九つの星の都”は、シェリアックスの市民達の失われた希望をそのまま形にあらわす“黄昏の街”へと成り果てたのである。その後は血なまぐさい対立が数十年続き、ついにはこの混沌から抜け出すためには、強硬な教条を持つ悪魔崇拜にすぎるしかないと思えるような状況にさえなった。かつては人々の力を体現していた都市は、いまや人々の落胆と絶望を映し出すようになった。街の中で希望は薄れ、アローデンの聖職者たちの代わりに街路を闊歩するのはシャドウ・ビースト達。確かに商業や軍事においてはウェストクラウンの影響力は失われてはいない。しかし信仰を失い、評判も色あせたこの街の力は、以前のものからは比べようもない。

内海の都市の中では最も多様で洗練された都市のひとつであるウェストクラウンは、同時にひとつの謎でもある。日中は、様々な様式の建築物で彩られ、アヴィスタンやガルンドからやってきてこの街を我が家と呼ぶようになった人々でごった返すこの街は、他の知っている限りの様々な街々、国々を思い起こさせてくれる。街のそこそこには宗教的な場所が散在している。それは活発なものもあれば寂れているものもあるが、それぞれに信仰篤きもの、物見高いもの、不信心なものを引き寄せ続けている。街の北側の廃墟化した区域でさもが、危険な瓦礫の間から非合法な品物や貴重な宝物を見つけ出せないかと狙うものたちの興味を捕らえて止まない。しかしいったん日が沈むと、ウェストクラウンで戸外を歩くのはよほどの愚か者だけとなる。暗い小道や水路沿いをシャドウ・ビーストたちがうろつきまわるからだ。

“失われた凶兆の時代”以前、ウェストクラウンは自らを“アローデンの文明の輝ける光”として誇っていた。今、人々は我々を嘲って言う「ウェストクラウンにはなんだってある、文明的なものも、そうでないものも—アローデン以外は」と。よそ者の言うことは放っておこう—真実を知っているのは我々なのだ。我々がアローデンを捨てたのではない。ウェストクラウン市民の堅信にも関わらず、アローデンこそが我々を捨てたのだ。我々はこの逆境を受け入れ、かの神の裏切りに替えて、力と秩序を我々の後ろ盾とした。ヘルナイトたちが我々の道を舗装し、スルーン家は栄光へと向かってその道を行く。彼らが首都を移したことに私は欠片の不満も抱かない—この街は我々の過去の過ちを思い出させるだけの場所に過ぎない。それに、いちウィ

スクラーニとして言わせて貰えば、僧侶や貴族たちがうじゃうじゃ居すぎない街の方が稼ぐにも出世するにも良い場所なのだ。

——アルキニ・ヴィタロン、アルキニ薬店

## ウェストクラウン

**巨大都市**：標準的でない（名前だけの市長と複数の犯罪王たち（“盗賊会議”）） **属性**：秩序にして悪

**gp上限**：16,000gp

### 人口統計

**人口**：114,700

**タイプ**：国際的（88%人間、7%ハーフリング、5%その他の種族）

### 有力者

**リクター・リッヒエマー・アルマンゾール**：リヴァド砦司令官にしてヘルナイトの“檻の騎士団”のリーダー（秩序にして悪、人間の男性のファイター7/ヘルナイト7）；**アベリアン・アルヴァニクシ市長**：ウェストクラウン市長にしてアルヴァニクシ家の家長（中立にして悪、人間の男性のローグ7）；**ヴァッシンディオ・ドロヴェンジ**：ドロヴェンジ家の家長（秩序にして悪、人間の男性のアリстокラート14）；**アサド・グラリオス**：グラリオス家の家長（混沌にして善、人間の男性のアリстокラート5/ウィザード5）；**オクターヴ・ジュリストーク**：ジュリストーク家の家長（秩序にして悪、人間の男性のアリстокラート3/ローグ3/アスモデウスのクレリック3）；**バルトロ・メツィナス**：メツィナス家の家長（秩序にして中立、人間の男性のモンク5）；**イルタス・マーティス<sup>ドゥッソタール</sup>衛兵総隊長**：ウェストクラウンのドゥッソタールの隊長（中立にして悪、人間の男性のアリстокラート3/ローグ3）；**エイアティン・オベリーゴ**：オベリーゴ家の家長（秩序にして悪、人間の男性のローグ6）；**マークス・ファンドロス**：ファンドロス家の家長（真なる中立、人間の男性のアリстокラート3/バード2）；**ケイジェン・ティレルノス**：ティレルノス家の家長（秩序にして善、人間の男性のアリстокラート4/イオメデエのパラディン4）；**カザルス・ヴィタライン**：港の管理者（秩序にして中立、人間の男性のファイター4）；**ヴォルネ將軍**：ジェムクラウン湾近衛海軍の司令官（秩序にして悪、人間の男性のアリстокラート5/ファイター10）

## 地理

“黄昏の街”は、三つの独立したパレゴ（“大きな区域区分”ほどの意）に分かれており、このことはこの街の住民なら皆よく知っていて、暮らすうえで便利に使っている。この三つとはすなわち、レジコナ（“浮かぶ宮殿”ほどの意）とも呼ばれるウェストクラウン島、ずっと人が住み続けている地域であるスペラ（“希望の祭壇”ほどの意）、そして

ウェストクラウン北部の廃墟化した地域であるドスペラ（“ 絶望の祭壇 ” ほどの意）である。ただし、地元の人々は道を教えるときにはこのパレゴではなくより細分された単位であるレゴ（区域や区画ほどの意）を用いる。ウェストクラウンの中でも海に面した部分は、レゴ・カデル、レゴ・クルア、レゴ・スクリパ、レゴ・ペナそしてレゴ・サケロの5つに分けられている。川によって三つに分割された島にあるのは、レゴ・コルナ、レゴ・ライナそしてレゴ・アエルムである。ウェストクラウンとして、もう2区画を加える人たちもいる。ひとつはレゴ・フンダ（“ 農場地区 ” ほどの意）で、これは街とアディヴィアン橋との間にある丘と谷を指す。街の中の農場や食糧生産所もここに含まれる。プリパトゥラ（お追従を言うときにはレゴ・パトゥラと呼ぶこともある）は、ダーエンフローの川沿いに並ぶ荘園屋敷や貴族の館を総称するものである。

## 政府、政治、秩序

ウェストクラウンには何層にも重なった広範な勢力と政治と政府が存在する。多くははっきりと誰の目にも見えるものだが、未だに影に潜んでいるものはさらに多い。そして誰かがその勢力と衝突したときにはじめてそれは明らかになるのだ。この都市の権力は兵士どもの持つ剣に始まって、市長やその他の貴族たちの膨大なポケットに吸い込まれていくものであるが、その最終的な到達点は、伝説の“ 盗賊議会 ” の秘密の宝物庫だということは誰もが知っていることである。

### ドッターリ

ウェストクラウンで見られる、法と秩序の強制力といえばまずはドッターリである。これは市警や都市の衛兵を指す。ドッターリの面々はその地位に関わらず、すべてアローデンの目をかたどった市の紋章を身につけている。これは盾やタヴァードの赤地に黒く染め抜かれているのである。ドッターリの士官はさらに、左腕にこの赤と黒が反転した（つまり黒地に赤く染め抜かれた）紋章をつけている。地位が上がるとこの紋章の位置は移動する。下士官のときは肩に付けていた紋章は、前腕に移り、そして市長以外の命令には応じる必要はないとされるドウソータルになると、指輪に紋章を付けるようになる。

ドッターリはその地位に拠らず、1名の上官に率いられた6～7名の兵士という分団で常に行動する。分団5つが一人の隊長の管轄下にあり、少なくとも三人の隊長は一人の士官の指導下にある。そうしてひとつのレゴ（地区）あたり少なくとも二人の士官がいてそれぞれ4名いるドウロタス（役職持ちの衛兵）の誰かの下についているのである。書類上では、ドッターリは市長が直接指名した“ 衛兵総隊長 ” の指揮の下に動く単一の組織であるとされている。ちなみに現在この総隊長を務めているのは、市長の甥っ子で、しょっちゅう飲んだくれてばかりいるイルタス・マーティス<sup>ドゥソータル</sup>衛兵総隊長（中立にして悪、人間の男性のアリストクラート3 / ローズ3）である。イルタスは“ 街の広範な防衛に専念するより自分の命

令をあれこれと出すほうを好む”ため、彼が放り出した責務を担うのはしばしば彼の部下たちということになる。というわけで、個人的な確執や政治理念があれこれと作用し、ドッターリは4つの独立した勢力にほぼ分裂してしまっている。

**ドッターリ：サリア・ロッシン衛兵大隊長**（混沌にして善、人間の女性のファイター6）が通常のドッターリを指揮している。これは街の門を護り、スベラの通りを警邏する人々である。また、彼女は市井の指導者たちに対しても影響力を持っている。サリアは個人的にヘルナイトたちを軽蔑しており、どうしても必要なときにのみ彼らと協働するようにしている。ただしそれも、連中に彼女を罪に問う理由を与えないためである（彼女が幼い頃、彼女の叔母はそうやって罪に問われたのだ）。

**コンドッターリ**：すべての浮き港の公的なドックには二艘のアデルと一艘の帆付のはしけが係留されている、そして**スカージ・ボルヴォナ衛兵大隊長**（中立にして悪、人間の男性のソーサラー5）がコンドッターリ（“運河の衛兵”ほどの意）を指揮している。これはウェストチャネル、ダーエンフロー、そしてレジコナの運河郡を警邏する人々である。情熱的なウェストクラウンっ子であるスカージが持つ友人や政治的なつながりはドゥソタールその人と並びうるほどであり、野望を抱えたこの男はレジコナに住む貴族たちの間でずいぶんと積極的に振舞っている。ここ14年間、彼の影響力の拡大は伸び悩んでいるが、これは彼が自身の娘ではあるものの半分エルフの血を引いたカシサーラの存在を隠すために、彼女をオステンソーの家族の下へと送ったことも影響している。

**ランドッターリ**：レゴ・カデルの北東部にあるドター砦の外を拠点とするランドッターリ（“廃墟の衛兵”ほどの意）は、**アリク・トゥオノス衛兵大隊長**（真なる中立、人間の男性のレンジャー8）の指揮下にある。アリクは皮肉屋だが公正な男で、自分がこの地位にある唯一の理由は、長いこと家族ぐるみで敵対してきた**エコパール・ドルマニス**（混沌にして悪、ティーフリングの男性のファイター6）が指揮官の地位に着き、友や良い兵士たちの生命を無駄に浪費するのを防ぐことであると考えている。自分の配下となることは要するに左遷であり、社会的な罰として位置づけられていることをアリクは理解している。しかし彼も彼の部下たちも、レゴ・カデルの壁となり、廃墟や市外の脅威や危険を遠ざけておくという責務に誇りを持っている。

**レジドッターリ**：レジドッターリ（“宮殿の衛兵”ほどの意）は、**リアナ・ストリクス衛兵大隊長**（混沌にして悪、人間の女性のファイター3/ウィザード2）の指揮下で活動している。リアナは彼女の部下を自分の私的な奴隷のように扱い、ちょっと自分に逆らったからといって彼らを公衆の面前で罵倒することもしばしばである。部下たちが彼女の支配を受け入れているのは、他のドッターリよりも高い給料が払われていること、そして彼らの勤務地がレジコナの壁の上であり、またこの都市の裕福な有力者たちと誼を通じやすいという二つの理由で他のドッターリよりも上に見られていることによる。リアナ自身は7年前にウェストクラウンにやってきて以来、少なくとも3人の街の貴族に取り入ってその片腕かつ愛人となってきた。ただし“盗賊会議”における彼女に関する扱いは“有用な女”

ではなくむしろ“遊び相手”なのだが、そのことに彼女はまったく気づいていない。

## ウェストクラウン用語集

ウェストクラウンっ子は――シェリアックスの他の大都市の人々と比べて――地位や肩書き、地名、家に対する立ち位置等に関する広範な語彙を有している。

**アデル**：小さな個人用のはしけ

**ウィスクラーニ**：ウェストクラウンに住むもの、あるいはウェストクラウン由来のもの

**ヴァネオ**：シェリ風の荘園屋敷

**ヴィラ**：シェリ風の邸宅

**ドゥソタール**：市警の総隊長

**ドゥロタス**：市警の大隊長

**ドッターリ**：ウェストクラウン市警

**ハロラン**：ランタンを持つ人

**パレゴ**：“大きな区域区分”で、ウェストクラウンには3つの大きな区域区分がある

**フィラージェ**：夜間、ウェストクラウンの主要な場所を照らし出す人間ほどの大きさの大松明

**レゴ**：ウェストクラウン内あるいはその近辺の一区域

## ウェストクラウン追加情報

古代からの活気溢れる街である以上、ウェストクラウンについてはこのページに記載できる以上の情報が存在する。今後発行されるPathfinder誌にもさらなる詳細な情報や数十の場所に関する説明が掲載される予定だが、ウェストクラウンの歴史やその周辺地域の情報、そしてそれ以上のものが[paizo.com/pathfinder](https://paizo.com/pathfinder)にて無料でダウンロードできるCouncil of Thieves Player's Guide（訳注：『“盗賊会議”プレイヤーズ・ガイド』として別ファイルにてアップ予定）に記載されている。

## 市長

シェリアックスの法と伝統の下、ウェストクラウン市長（現行政府の言うところに拠れば“領主”だが）はドッターリを指揮下におき、都市を維持する――秩序をはぐくみ、都市機構を整備し、徴税人に税を集めさせることで――ための国庫を管理する。権力の最高位にあった頃、ウェストクラウンは近衛軍団を擁して反对者を倒し、税を集め、その富をきらびやかに示す手助けをしては高貴な人々を喜ばせていたのである。70年間、3代の市長を経る間に都市の税収は減っていき、市長たちは福祉の多くを切り捨てねばならなくなった（そしてまた、市長自身の楽しみに費やす額も切り下げざるを得なくなった）。商業が停滞し始めると、それ以外の影響も徐々に現れてくるようになった。

4689AR、アベリアン・アルヴァニクシは“地獄の大女王”アプロゲイル 世によってウ

エストクラウン市長に任命された。これはすなわち、アルヴァニクシ家がエゴリアンの宮廷で長いこと繰り広げてきた稚拙な策謀と種々問題のある姻戚関係からの政治的脱出とも言えるものだった。彼が政治的にはずいぶん微妙な立場にあったとはいえ、ウィスクラーニの間ではアルヴァニクシの名は相応の影響力を残していた。彼は前任者の側近を中傷したり権力を損なわせたりしながら自分自身の政治力を膨れ上がらせていった。多くのものが、彼が退陣させたに等しい前任者のアーサン・チャラス市長の突然の死には彼が一枚かんでいるのではないかと疑っていた。

それはまったく真実ではなかったのだが、みなを考えを改める必要もないだろうとアベリアンは考えていた。彼がまだ若く、権力も持っていなかった頃、恐怖こそが彼への反対意見を封じる大きな力になっていたからである。ここ数年、アルヴァニクシ市長はシェリ・オペラにずいぶん傾倒しており、膨大な公共の資金を様々なオペラハウスや娯楽施設の維持や再建に注ぎ込んできている。彼はこれを“ウィスクラーニの精神を称揚するために彼らの好むものについて状況を改善してやっている”と考えているのだが、市民の多く（特に島のオペラハウス—いくつかはスペラにもないことはないが—まで行く金のないもの）は、市長がウェストクラウンの状況改善のためでなく自分の楽しみのために公共の資金を浪費していると考えている。事態は結局そういう状況なのだが、オペラに傾倒するようになってから、この悪意に満ち、そしてほとんど無能に等しい市長は一般のウィスクラーニの諸問題に口出ししてくることがなくなった。というわけで大衆はこの退廃に黙って耐え続けているのである。

## 盗賊会議

4286AR、ウェストクラウン内の7つの有力なギャングと盗賊のギルドが連合してこの盗賊会議を設立したのだといわれている。そしてこの会議は、数世紀にわたって都市の裏社会を牛耳り続けてきたのだ、と。この会議が設立されたのはすさまじい犯罪戦争が勃発しようというときであった。そのため、設立者たちはこの街の犯罪組織をすっかり牛耳って肥え太り、この会議に加入したギルドの長たちは土地と貴族の肩書きを買うだけの金を手にしたのである。金を手に入れたことで彼らは通りの追剥よりは事業家としてやっていくだけの機会をも手にいれた。以後、盗賊会議の長たちは相応の世間体を身につけ、ウェストクラウン内での影響力を行使して互いに助け合ったり蹴落としあったりし始めたのである。

4340年までには、ウェストクラウンの貴族の半分が盗賊会議と何らかのかかわりがあるとささやかれるようになった。4469年には、首都内での強盗や誘拐、ゆすりたかりの件数が爆発的に増加したことから、コラディナ女王自らが彼らと取引をし、相応の金を払って犯罪を抑えてもらうように頼んだなどという噂もささやかれた。その後、大規模なギルドの取締りが行なわれ、ちょっとした犯罪のために首を刎ねられたものも何人か出た。最終的に、ドッターリは“盗賊会議”の殲滅を宣言した。そして盗賊たちはあからさまな犯罪

行為は街の外にうろついている手先のギャングたちにさせておいて、自分たちは密輸や武器の密売、高利貸し、その他の違法な商業行為に専念するようになった。かくして“盗賊会議”はある種の公然の秘密となり、やがて伝説の中に消えていった。

その後数世紀は“盗賊会議”の雌伏の時代となった。資金は減少し、内部抗争は絶えず、国家レベルでの革命まで起こったが、彼らは“紳士的な犯罪”の名誉ある伝統の名に恥じぬよう耐え抜いた。ウィスクラーニのほとんどは“会議”について何も知らない。過去の気違い事業家たちの亡霊か何かだと信じているのだ。実のところ、“盗賊会議”は地元の市民たちなどほとんど相手はしていない。彼らが標的として見ているのは、より大きな資金を持つ組織や商会、宗教団体、そして国外の事業家たちなのだ。また、彼らはある意味“正義の団体”とさえ考えられているようなところがある。というのも、彼らは自分たちのライバルになりうるものはどんなちっぽけなものでも根絶やしにしたため、ウェストクラウンではどんな新興ギャングも叩き潰されて生き残れなかったためである。このギルドは、地元の貴族たちもほとんど相手にしない。というのも、街のもっとも有力な貴族が既に“会議”の一員であるからである。彼らはウェストクラウンの支配権をほぼ完全に掌握し、ありとあらゆる局面の裏で糸をひいていたのである。“会議”とアルヴァニクシ市長との関係はほぼうわべだけのものといってよく、“会議”は市長を好き勝手に行動させているが、万が一彼が“会議”の面々を吊るそうなどと考えたときに備えて充分以上の罣を市長の周りに張り巡らせている。今のところ、ドッターリに“会議”の邪魔をさせないという点で市長は充分に“有用”であり、“会議”は市長にそれだけの返礼はしているというわけである。

## 貴族たちと政治的権力

“黄昏の街”は、かつての輝かしかったあの街ではない。かつてはありとあらゆる信仰をもつ巡礼者たちが溢れていた街は、いまや貨幣と富を崇めるものの巣窟と成り果てている。この街が商業都市に移行したことで、港はいよいよ国際的にはなったが、街が魂を失ったことを嘆くものは多い。アローデンの死はウェストクラウンから宗教的優位のほとんどを剥ぎ取り、貴族同士の内戦によりわずかに残った意気地もそっくり失われた。またスルーン家が首都を移したことによって、ウェストクラウンの権力者がかつて持っていた政治的影響力も取り去られた。4606年には50以上あった有力なウィスクラーニの家の1/3以上が、アローデンの死後12年のうちに経済的に、あるいは文字通り破壊された。続く数十年のうちに、19の家が、スルーン家の盛り立てによってシェリアックスを支配するようになった北方のエゴリアンへと移った。ウィスクラーニであり続けたのはよほど恵まれた家系のものか、あるいはスルーン家寄りの考え方からすれば家系の恥となるとして放逐された分家の輩といったものだけである。今日では12の貴族の家がウェストクラウンの有力者として残っている。彼らの影響力は貿易や商業を通じておおっぴらになっているものもあれば、“盗賊会議”を通じてひっそりと及ぼされているものもある。

コラムに掲載した“ ウィスクラーニ貴族名鑑 ”では、各家をウェストクラウン内およびその周辺における実際の社会的・政治的な影響力の強さの順に並べてある。それぞれの家の経済的価値や流動資産の額は、経済活動の結果やそのときの仲間や友人の持っている資産の額、そして裏社会の犯罪的活動で得た稼ぎによってそのときどきで変わってくる。そしてそのときの資産の流動がどうであれ、この12の家は、自分たちのいいなりにできる他のどの家よりも資産も影響力もふんだんに持っているというわけである（とはいえ、実際にこの有力な家の資産状況は、その影響下にある家の資産状況に左右されたりもするのだが）。

### ウィスクラーニ貴族名鑑

以下はウェストクラウン内においてもっとも影響力の強い12の家を、影響力と資産の順に並べたものである。また、それらの家の勢力下にある家についても付してある。

家	出自	影響下にある家
ドロヴェンジ	タルドール	ロリアレン、クセリシス
オベリーゴ	シェリアックス	アウラマグザ、ギーヴァル
サリスフェル	シェリアックス	チラース、ルスタカス
グラリオス	シェリアックス	ミロネス、イチ
アルヴァニクシ	シェリアックス	キウッチ、ラスドヴァイン
ジュリストーク	タルドール	セイドライス、ケマイン
ディオソ	シェリアックス	ジャルテロ、ウカーラー
ティレルノス	タルドール	スターノン、エトロヴァイン
ファンドロス	シェリアックス	チャード、ノルモン
ノーラリクス	シェリアックス	ニンミス、ルファノ
ロサーラ	タルドール	ウルヴァウノ、アテナール
メツィナス	タルドール	ヴィタロン、ミセッペ

### ウェストクラウンの夜

事の発端は4676AR、ロヴァでのできごとである。影のなかを忍び歩く奇妙なクリーチャーの話だったものは、ウィスクラーニが暗い小路で行方不明になり始めると街じゅうで恐慌状態を引き起こした。白死病が再発したのだ、かの悪名高い“ 盗賊会議 ”が復活したのだという噂がたちどころに広まった。やがてその噂は、デルヴヘイヴンのパスファインダー・ロッジで影による災厄が起こったという話、そして黒い、実体をもたない存在が通りをうろついているのを見たという報告に取って代わった。為政者側は数ヶ月の間この問題を無視して放置していたのだが、とうとう重い腰をあげ、大鼠かゴブリンか、さもなければゴブリン・ドッグあたりがうろついているだけのことだろうと軽くあ



しらっていた問題が実際はなんであるのか調べることにした。しかしドッターリはこのような深夜の狩を行なうだけの装備を持たされておらず、そしてことこれに関しては、市役所は空手形を切るばかりだった。恐怖と怒りは、ついにこの事件をナイデルからの暴徒の仕業だと責任を押し付け始めるに至り、その結果、群集が真昼間にナイデルの貿易船を二隻焼き落とすという騒ぎにまでなった。最終的に、公共の安全を守るため、外出禁止令が布かれる一方で、ドッターリと経験豊富な傭兵で構成された精鋭部隊でウィスクラーニの夜を襲った影の災いを除くようにという命令が下った。ドスペラや古代から存在する街の下水機構で大掛かりな作戦が何度も行なわれたが、得られたものは少ない一方で多くの人員が失われたただけだった。というわけで、夜間の外出禁止令は以後30年以上経過した今も継続されており、うっかりとそれを侵せば命までも危険に晒されるというわけである。

現在、日が落ちることにありとあらゆる店は大急ぎで店じまいをし、それぞれの家では角灯に灯を点して扉の外にかけようになっている。ドッターリたちはパレゴ・レジコナじゅう、そしてパレゴ・スペラの主な広場にある人間ほどの大きさの松明、フィラージェに火をつけ、7人組で“光の島”じゅうをパトロールしてまわる。酒場や集会所、その他の同様な施設では、暗くなってからそこに留まるもののために寝袋を用意しており、日が落ちるとすぐに“今夜の宿泊者”たちから2spずつを集める。暗くなってから通りに出なくてはならない人は、だいたいハロランを持ってゆく。これは7フィートの高さの鉤のついた棹で、上に明るいランタンをつるしてあるもので、これがあれば街のどの道でも行くことができるというわけである。

夜間の脅威に街が順応しているとはいえ、件のクリーチャーがどのようなシロモノなのか、連中がどこからやってくるのか、いったい何の目的でやってくるのかということは、依然、噂の域を出ない。そしてウィスクラーニたちはこれについて、それぞれに様々な持論を持っているのである。街の住民のほとんどは、厳しい外出禁止令を受け入れ、それに慣れているが、この禁止令はスペラではしょっちゅう破られるし、さらに災難にあうことのほとんどないウェストクラウン島においてはもっと軽んじられている。外出禁止時間に外出している住民を捕まえたドッターリは罰金として5gpをとることになっているが、ほとんどは違反者を“はやく行け”と急がせるだけである。とはいえ、毎週、この種の違反者を見舞った恐るべき運命に関する新しい話がささやかれ、この夜間外出禁止令を強化している。年に数回、市長はこの街の通りをうろつく姿なき捕食者を非難し、この脅威を終わらせるべく新たに努力する旨言明してみせる。が、件のクリーチャーの謎めいた出現以来30年、状況はほとんど変わっていない。

## ウェストクラウン概観

ウェストクラウンのどこにいるかということを言いさえすれば、その人の周囲にある

建物の大きさ、高さ、どの程度贅沢かということがすぐに答えられる。大きさにこそ違いはあれ、この街の建物はどれも石の基礎の上に建てられている点では共通している。それらの石の多くは、周囲の丘やアディヴィアン川の川沿いから切り出されてきた軽い石である。街のより富裕な地域では、建物はすっかり石造りで、その中には特殊な素材を使っているものもいくらか存在する。ほとんどの場所で、建物は基礎の上に3階建て以上の木造建築が伸びたものとなっている。木材はこの土地に生える明るい色の木から作られたものもあれば、バロウッドで切り倒され、川を下って運ばれてきた暗い色のバロ櫨のものもある。高層の建物は必要な場合には互いにもたれあうように建てられており、建物が林立している場所は、すなわちそこは富裕な地域で貴族の影響があるということである。

ウェストクラウンの道や歩道はありとあらゆるところで曲がりくねっている。これは建物が無秩序に建てられたことの裏返しである。街の壁はすっかり石板で覆われている。富裕な地域の大通りにも石ころが転がり、雨が降るとひどく滑りやすいが、道はひととおり石畳で敷き詰められている。通りの水は格子戸から下水道に流れ込むか川に戻るようになっており、この格子戸をきちんと閉めておくことはドッターリの雨季の非公式な仕事になっている。雇われて道路の手入れや清掃をする人間はいることはいるが、その金を出せるのは金持ちに限られるため、貧困層の暮らす地域では、その住民が我慢できなくなって片付けるか、親切な僧侶が掃除をするまで、道にはゴミが山と積みあがっている。街が“アローデンの住まいなすところ”ではなくなって影響力を失ってから数十年、ウェストクラウンの誇りと高慢は消え去っている。その結果、多くのウィスクラーニはもはや近隣を清潔にし、壊れたところがあればきちんと修繕しておこうなどという誇りを失い果てているのだ。風雨に晒された建造物は手入れされないままで、いくつかの小路はゴミで塞がれ、物事が変わるのはドッターリが槍をつきつけるか、相応の金が積まれたときのみとなっている。多くの人々の信仰心はアローデンと共に潰え去ったが、その司祭や信徒、そしてアローデンの聖人たち（P.###参照）はウェストクラウンとそこに暮らす人々を見守り続け、支え、寺院を修繕し、そしてそれと同様に他の家々の修繕も行なったのである。

街のパレゴ、すなわち“大区画”は街のおおざっぱな区分となっており、8つの小区画はそれをさらに細かく分けるものとなっている。以下の番号のついた場所はP.###の地図に対応している。

**上アディヴィアン川 / ダーエンフロー**：ウェストクラウンの北端の壁から1マイルもいかないところで上アディヴィアン川は支流となって枝分かれし、丘を巡りながら西へと流れていく。この流れはアディヴィアン橋あたりまでは強力な防衛線となりうるが、次第に細り、浅いクリークや水溜りへと分かれてゆき、ついにはダーエンフェンズの湿地帯に消えてしまう。ダーエンフローはこの流れのこの土地での名だが、これは、凋落した自らの家の最後の宝を抱いてこの沼地に逃げ込み、敵に奪われるのを防いだ、ある貴

族の名にちなんでいる。

**ウェストチャネル：**ダーエンフローが本流から分かれて200ヤードほどのところで、流れはもう一度別れ、分かれたものは鋭角に曲がってウェストチャネルに流れ込む。この流れはウェストクラウンの主要な水路で、島と海岸線の作る自然の堰のために流れは遅くなっている。かつて多くの人々がウェストクラウンはアローデンに祝福されたと信じていたころは、ウェストチャネルや島の運河にゴミが投げ込まれることはめったになかった。東の岸に漂着したゴミは水の流れの力で自然に堆積し、ウィスクラーニはこの“土地”もゴミ捨て場として使ってきた。アローデンの崩御後1世紀が経過した今、さらに多くの木や船の残骸、その他のガラクタがウェストチャネルや運河に投げ込まれるようになり、時には港の管理人の部下たちが片付けに来るまで、交通の妨げになるようなことさえある。

**サウスラン：**サウスランとは南アディヴィアン川の別名で、昔から、ガラクタ類を東の岸に向かって放り込む場所として使われていた。ウェストチャネルの穏やかな流れとはことなり、ウェストクラウン島沿いに流れる南アディヴィアン川の流れは早く強く、つながれていなかったり舵をきちんととっていなかったりする小船は東の岸か、あるいはもっと南の湾のほうまで流されてしまう。

## パレゴ・レジコナ

ウィスクラーニはウェストクラウン島をレジコナと呼ぶ。運河が網の目のように走る8つの島を取り囲むのは、レジコナの壁で、鎖で吊った橋がそれぞれの運河の上に渡されて島と島とを繋いでいる。街の人々のほとんどは、自分たちの金と労力で立てられたこの壁の内側を見たことがない。というわけで、レジコナの中では何が起きているのかということとはかしましく噂されている。街の人々や街を訪れた人が見るのは、かつての宮殿やグランド・オペラハウスなど、街で最も背の高い建物が壁の後ろから壮麗にそびえている様なのである。

レジコナの8つの島のそれぞれには、二つ以上の大きなヴァネオ（荘園屋敷）か完全なヴィラ（屋敷）がある。これらの屋敷に住んでいるのは貴族や有力なウィスクラーニの一族である。10の貴族の一族が、それぞれに自分たちのヴァネオがある島の社会的な法的にそうかはともかく 支配権を主張しており、彼らの“支配”は、それぞれの一族が擁する傭兵の一団でなければ、しばしばレジドッターリを賄賂でもって自分の側につけたうえで行なわれたりする。レジドッターリに守ってもらえるはずと思い込んだせいで権力ばかりか命まで失った一族も少なくない。彼らは、自分たちの守護者であるはずのものがとっくに敵に買収されていたと知って没落していったのである。ここで暮らすものなら子供でも知っていることわざではこういうのだ 島の水は砦にして檻、信じられるのは潮の流れ と。

ウェストクラウンの海辺で生きるとは、つまり商業から何らかの利益を受けるというこ

とである。そうしてレジコナはかつての富を今もがっちりと維持し続けている。街の本土にある地域では、人の住めなくなった廃墟が現代風の建物に取って代わられているが、レジコナではシェリアックスとタルドール双方に対して権勢を振るっていた古き輝かしき時代の様式が未だに残っている。タイルで葺いた手すり付の屋根、射手かヴォカリ（“声の衛兵”の意）を一人置けるようになった針のような尖塔、滑らかに磨かれたアーチつきの回廊……。道はすべて滑らかな石で舗装され、道の両側には建物沿いに排水溝が設けられ、排水や廃棄物を下水格子か運河へと流し捨てるようになっている。

**レジコナの壁：**このがっしりとした防御壁がウェストクラウン島のぐるりを取り囲んでいる。壁は常にレジドッターリが巡回しており、さらに塔や壁の衛兵詰め所の隣の部分には少なくとも一人の兵士が詰めているようになっている。塔は武器庫や食料庫、およびその他の物資の貯蔵庫として機能している。通常、どの島でも、塔ひとつあたり30人の割合でレジドッターリがいる。

**鎖の架け橋：**運河をはさむ塔は、“鎖の架け橋”でつながれている。これはがっしりとした石のアーチで、鎖の門を上げ下ろしするためのウィンチが取り付けられているものである。この棘つき鎖の分厚いカーテンは緊急時、あるいは衛兵総隊長またはボルヴォナ衛兵大隊長が気まぐれを起こしたときに運河の中に垂れ下がることになっている。彼らはだいたいにおいて、つい最近処刑した反逆者の身体を鎖の棘に突き刺し、それがはっきりとわかるように鎖を下げて、見せしめと警告に使っている。

**運河：**運河を管理しているのはコンドッターリで、これはしばしば貴族どうしの抗争で相手方を追うために出された貴族の私兵と衝突を繰り返している。レジドッターリ同様、コンドッターリの装甲を施したアデルやスキフは“買う”ことができる。運河の壁はすべて水面から10フィートは高くなっており、運河が溢れてレジコナが水に飲み込まれるような洪水は、400年前のそれ以来起きていない。運河の両側には、通常の水面と同じ高さに幅7フィートの石の道が設けられており、ここから上の通りまで、1段5フィート四方の階段が延びている。乾季には、この場所に大昔から伝統的に続いている自由市場が開かれる（ただし、春から初夏にかけての増水期には、この道は水に沈んでしまう）。アデルは壁に近い階段の柱につながれ、そこから乗客が乗り降りしたり、腕木を組んで物品（あるいは貴族の乗った輿）をつみ降ろしたりしている。運河のドックだけは、運河を維持するものとして独立を保っている。いったん船がドックの入り口をくぐってしまうと、そこはコンドッターリではなくドックの持ち主の縄張りなのである。

**運河の橋：**運河の両岸から、少なくとも200フィートごとにひとつは跳ね橋が渡されており、運河を船が通るのに必要となると、奴隷たちが橋を吊り上げるウィンチをまわすのである。橋脚の土台がある土地の持ち主が誰であろうと、橋を管理しているのはレジドッターリであるが、追手の足を止めたり、誰かが別の島に逃げるのを留めようとしたりしなくてはならなくなったものがその権限を侵害することは多い。とはいえ、すべてのものは河川法令に従うことになっており、船の妨げになるとあれば橋を上げなくてはならない。

## レゴ・コルナ

“王冠の地区”には、かつてのシェリアックスの権力の中心地だった場所　すなわちシェリアックスの宮廷とそこに仕えるものたちの土地や家　がある。インブリアックス、ドゥララサ、シラオンなど、かつてはこの国で最もあこがれた土地は、過去三十年の間にわずかながら栄光を回復している。

1. **コラダス**：シェリアックス帝国の大いなる王城であり、王座を擁していたこの巨大かつ頑丈な城は、ろくに手入れもされていないせいでずいぶんと落剥してはいるが、それでもかつての威容の面影を残している。現在でもこの場所は、貴族や豪商の仕事場や仮の宿、あるいは中立の会議場として、また遠くの港街からやってきた大使にこの街を印象付けたり、彼らを“港のごろつきども”から守ったりするために用いられている。この城の地下には怪物の出る秘密のダンジョンがあって、それはアローデンの死後から今になっても完全に探検されてはいないのだという噂が根強くある。
2. **ヴァネオ・ドロヴェンジ**：ドロヴェンジの本邸であるヴィラは街の西、ダーエンフロー沿いに存在するが、それとは別にヴァネオ・ドロヴェンジは街で一番裕福な一族としての威容を誇っている。この堂々たる三階建ての荘園屋敷は、他の多くのウェストクラウンの建物とは異なり、毎週金曜日ごとに、この屋敷の奴隷たちによってきれいに磨きたてられる。というわけで、その緑の大理石でできたアーチや黒いスレートの屋根板は周囲のそれと比べてぴかぴかに光っているのである。  
ドロヴェンジ家はインブリアックスの事実上の社会的な長である。
3. **ヴィラ・オベリーゴ**：この堀で囲まれた屋敷は、“四家抗争”の終焉以来、オベリーゴ家の第一の領土である。オベリーゴ家はシラオンで行なわれるありとあらゆる活動を支配している。
4. **ソスタール別邸**：この離れ屋敷はシラオンの南端、ウィスザール運河とスラチ運河が合流するところに伸びている。邸の北側の壁はすすで汚れてしみだらけだが、2世紀以上前の“大干害”の間にソスタールによってそこに彫り込まれた浮き彫りは未だに残っている。シェリアックス軍の強大さを描いた四つの場面は当時の王ヴリラルを喜ばせ、その命令によってソスタールと彼の弟子たちが作った石像や壁の浮き彫りは、今でもウェストクラウン中の通りや公園に残っている。
5. **ドルヤナラ**：これはシェリアックスの皇帝の第二の宮殿で、三階建てのソラリウムがついている――この宮殿の大きな翼の壁は、すべて金属で縁取りされたガラスでできているのだ。4436AR、ドルヤナ女王のためのアローデン神殿として建てられたこのソラリウムから、女王は何ものにもさえぎられないアローデナーマの光景を楽しんだのである（彼女の夫であったアリオックス　世王が、景観の邪魔になる建物をすべて取り払わせたためであるが）。土地の人々によれば、召使がこの神殿の中でアローデンの死について口にした瞬間、ドロヤナの亡霊の叫びが響き渡ってすべてのガラスがひび割れたとい

うことである。この宮殿は、ガスボダール王一家の死後に起きた動乱の数十年の間にあっさりとして略奪の対象となってしまった。宮廷がエゴリアンに移った後、イオメデエの信者たちが、ドロヤナラをアローデン、イオメデエ、そして関連する聖人たちのための聖所として整えて欲しいと要求した。そこで行なわれた最初の儀式は、ドロヤナの遺志を継ぎ、彼女を聖女として認めるというものであった。多くの人はこういう　毎年、春分の日が昇ってから日没まで、ガラスの壁はすすり泣き、感謝の涙で濡れるのだ、と。

6. **ヴィラ・ジュリスターク**：ドゥララサにあるヴィラ・ジュリスタークは、灰色の石と透明な明り取りの結晶で葺かれた巨大なひとつの屋根の下に、複数の建物が建っているという形の屋敷である。これはタルドールの砦の様式と、周辺の砦に存在する様々な新しい様式を混ぜ合わせたものである。

## レゴ・ライナ

“ 剣の地区 ” を構成するのは、中央にある大きな二つの島、トラリアムとイスラトゥラである。本来ついていた名が残っているのはこの二つの島だけで、今となってはこの二つの島の名の由来を覚えているものはいない。この地区の名は、ここで多くの有名な戦闘が行なわれたり、高名な刀鍛冶、鎧職人が仕事場を構えていたりしたことによる。

7. **ヴィラ・グルリオス**：この屋敷は西トラリアムの景観を占めている。この屋敷の赤い屋根の尖塔は、レジコナの壁から2階分上まで聳え立っている。

8. **スタヴィアンカーラ**：これは今でも人が居住しているものではウェストクラウン最古の建物である。この屋敷の壁はスタヴィアン　世皇帝がこの街を征服した際、彼の命令によってタルドールの奴隷が建てたものである。以後数世紀のうちに、この壁には漆喰を塗って彫刻をほどこしたファサードが取り付けられ、そのためこの壁はまるで二階建てのタルドールの軍用テントのように見える。この建物には、上手く隠された抜け穴があり、そこを通っていくと最寄の街の壁までいけることから、この屋敷は現在レジドッターリの隊長の屋敷となっている。

9. **ヴィラ・サリスフェル**：この黒い屋根を持ち、外堡によって守られた屋敷は、サリスフェル家の権力の中心であり、イスラトゥラ社会の中心地でもある。

10. **トゥリヴァードゥム**：このスレート葺きの屋根を持つ大きな建物は三頭政治の玉座ともいえる場所であり、シェリアックスの宮廷がここにくるまではウェストクラウンの権力の中心地であった。トリヴァードゥムはオベリーゴ家、ドロヴェンジ家、ジュリスターク家が、それぞれヴィラや屋敷を構えるまでは三家の施設軍隊の司令部としても使われていた。商人たちはトリヴァードゥムの1階のかつては裁判所兼管理事務所であったところを使っている。トリカリスタ（宿賃が手ごろであるということで、ウェストクラウン内でも人気のある宿屋のひとつ）が2階を占有し、共同の部屋を5つ（寝室として）、そして個人用の部屋を5つ（宿の店員や宿賃をたっぷり払った客用に）、そして大きな食堂を3つ持っている。3階と屋上庭園は、タルドールの大使、オパーラのヴォース・カイニアールの贅沢なペント

ハウスとなっている。彼はイオメデエのパラディンで、彼の家族は金で彼を大使の座に押し上げたのだが、彼自身はスルーン家を嫌っているため、エゴリアンの邸宅には帰ろうとしないのである。

**11 . ヴァネオ・ディオソ：**トライアムで一番堂々たる建物であるこのヴァネオは、ディオソ家が本来この建物を建てたクラファニス家を滅ぼして以来、ディオソー族の屋敷となっている。

**12 . ミラタンツァ：**“ 浮かぶ市場 ” は、島の召使たちが彼らの高貴な主人たちのために、食べ物やその他の物品を買い求める場所となっている。膨大な数の浮き板がこの場に碇で止められ、店主たちはそこを借りたり、あるいは自分の船を底に持ってきて直接物を売ったりすることができるようになっている。コンドッターリがミラタンツァでのすべての交通と取引を牛耳っており、この運河が合流する場所に建てられた、四つの赤と黒の大理石造りのアーチの間で売られた品物すべてについて手数料を取るのである。

## レゴ・アエルム

“ 宝の地区 ” は、ウェストクラウンで売られている珍しいものの出どころである。街の中でも最も新興の地域であるこの場所は、ウェストクラウン島の南半分、この一千年単なる泥の平原でしかなかった場所に発展した。シアル、ギアム、カハルの3つの島がこのレゴ・アエルムを構成している。カハルの南端には公園があるが、この場所では不思議なことに、どんな建物を建てようとしてもその度に奇妙な事故がおきており、建物が完成したことはない。4040AR、この土地は都市の富裕で暇のある人々のための公園となっている。

## パレゴ・ドスペラ

パレゴ・ドスペラ ( “ 絶望の祭壇 ” ) はウェストクラウンの北側の海岸部に見捨てられた廃墟や抑圧されたスラムを指すものである。ここでは道が補修されないことなどしょっちゅうで、ドスペラで走ろうものなら足首を捻挫したり脚を骨折したりして、その影の中で忍び寄る様々な脅威の餌食になりかねない。この地区の北部は完全に廃墟と化しており、この地区を取り囲む壁の上のランドッターリの射手がようやく治安を保っているような具合だが、南側のレゴは廃墟と “ 文明化された ” ウェストクラウンとの間の緩衝地域となっている。

## レゴ・カデル

“ 死の地区 ” は北部の廃墟を指すが、ウィスクラーニの中でも年かさのものは、アローデンの死の前はあの場所はレゴ・プレア ( 家づとめの奴隷や召使、そして下層の商人たちの家のある場所 ) だったことを覚えている。この地域の中では、携わった貴族たちがそれを知られることがないようにと願っているところの “ 超低価格の取引 ” が行なわれている。

この地域の炉や鍛冶屋は、まともな修理を施されていないにもかかわらず、まだ使い物になるのだ。見捨てられ廃墟となった多くの建物は、かつて酒場や宿屋、貸間や厩舎であったものである。ここには今でも住むものがあり、例えば蛮族が巢食っていたり、盗賊が住処にしていたり、はてはリュークロットからやってきたモンスターどものうち、ゴブリンに始まってティーフリングに至るまで、ここで生き延びるだけの力のあったものが住み着いていることさえある。このあたりが廃墟となってしまうとずいぶんになるというのに、まだこの場所を守っているガーゴイルがいるという話もある。

**くらがり市場：**ウェストクラウンの廃墟には、かの悪名高いくらがり市場が立つ。これはかつて略奪にあった寺院やヴィラ、劇場、その他大きな廃墟の中で立つという、移動市場である。蛮勇のあるものや愚かな者がここにありとあらゆる禁制品を買いに来るのだが、ここを守っているのはしばしば賄賂で買われたランドッターリだったりする。くらがり市場は半ば秘密の市場であり、麻薬や異国の毒、奇妙なクリーチャー、攫われた奴隷、その他思いつく限りのありとあらゆる禁制品が自由に取引されている。この市場の名前は、この市が立つのが日没前の2時間に限られることに由来している。悪党あるいはろくでなしのランドッターリに聞けば、ほとんど誰でも“未来のお客”にその市がいつ、どこで立つか教えてくれる　もちろん謝礼と引き換えに。

**野放図な庭：**継続的な手入れがなくなったため、公園やかつてのヴィラの庭は枯れ果てるか野放図に延び広がるかになってしまった。いまやその多くは雑草が絡まった茨の藪になっているが、野生の植物が生い茂って、それを求める人々がドスペラにやってくる理由になっている場所もある。これらの廃墟に守られるようにして、アースフェル森の西側では非常に稀な多くの薬草や植物が生えている一方、アサシン・ヴァインのような危険な植物や、巨大ハエトリグサまでもが植生となっている。

## レゴ・クルア

“血の地区”ではかつて、奴隷の売買のすべてに加えて皮なめし業から食肉処理に至るまでの、多種多様な底辺の、あるいはあまり人々が触れようとしない商売が行なわれていた。悪臭と汚穢が渦巻く場所となった結果、この地区にはウェストクラウンの北のスラムが形成された。これは、レゴ・カデルの壁の反対側に形成されたのである（ここでは壁の上に時々ランドッターリが姿を見せ、その周辺の治安をもう少しはましにしようとしていた）。ここから南に移動してゆくうちに建物は高く伸び、清潔になってゆき、そうして東ペガシ橋を渡るともうそこはパレゴ・スペラなのである。

**13. オベリーガン・ゲート：**ウェストクラウンが成立して間もない頃、オベリーゴ家はこの門の建設（そしてこれに関する保留された計画や明らかになっていない秘密の計画）に出資した。その結果、彼らのグリフォンの刻印が門の礎石に記され、また門の名も家名にちなんだものになったのである。幾重にも強化された門は三階建て以上の高さを持ち、街の壁の土台の二倍の深さまで深く、レゴ・クルアとレゴ・カデルの間に突き刺さっている。



この門の4枚の扉、二つの落とし格子、そして常に駐屯している12人のランドッターリがドスペラのあらゆる脅威を閉め出している。扉と落とし格子が空くのは、有罪判決を受けた囚人を廃墟に追放するか、逃げてきたランドッターリを比較的安全な門衛詰め所に逃げ込ませるという理由による命令をドッターリが受けたときに限られる。

**14．プレートラ：**この地区の最も大きな建物のひとつであるプレートラは巨大な奴隷市場で、まだ売られていない奴隷達を閉じ込めておくのにちょうどいい部屋がいくつもある。

**15．ウォルコート：**かつては聖人クルシサルの信者達の信仰の場であった建物は、アローデンの死後ほどなくして、使われもせず修理もされない状態となった。以来この場所は化け物が出る場所とみなされるようになり、影のような存在や亡霊のような姿についてのうわさが囁かれるようになった。ここを簡易宿泊所兼孤児院にしようという計画は数年の内にあっけなく潰え、ただ騒がしく決してここを立ち去らない住人達についての噂話が増えたのみである。

## パレゴ・スペラ

スペラ（“希望の祭壇”の意）には都市の繁華な部分が含まれる。かつてのこの場所は都市の上層階級から見下されていたが、今では生活を支える金銭を作り出す場所であると認識されている。西側には今でも多くの貴族が住んでいるが、レジコナとは異なり、ここでの支配者は政治ではなく商売と貨幣である。スペラを構成するのは以下の3つの地区である。レゴ・スクリパ（“書記の地区”の意）は商業の中心地で商人たちの地域であり、かつては帝国の書記官と印刷業者が住んでいた場所である。レゴ・ペナ（“貨幣の地区”）は、高額取引が行なわれており、高品質の品々や“新興の金持ち”の地区である。そしてレゴ・サケロ（“司祭の地区”）は、寺院と“昔からの金持ち”の地区である。

**16．ペガシ橋：**アローデンの生前に建造された8つの橋のうち、大きな二つの橋だけが残っている。他のものは破壊されるか、年月を経るうちに壊れてしまったのだ。この二つの橋がペガシ橋と呼ばれるのは、橋の両側と裏側に彫られた翼ある馬のモチーフに由来する。それぞれの橋は個別の名前を持ち、異なったデザインを施されている。ブレードウィング橋には羽毛の代わりに剣で覆われたペガシが彫られており、その剣の多くには過去のウィスクラーニの英雄の名が刻まれている。東の端のペガシは“トゥルーマウント”（アローデンの乗騎となる聖なるペガサスに付けられる名）の名で知られており、その翼には多くのアローデンの目が隠されている。

**17．キャナローデン：**これはウェストクラウン中で一番長い運河であり、また建造された当時からほとんど変わっていない運河でもある。水面から30フィート以上上に弧を描くふたつのペガシ橋の下を流れるキャナローデンの深さは、レジコナの運河の2倍である。運河の両側に聳える15フィートの高さの大壁にはアローデンの司祭ウラティアによる溝飾りが施されている。ウラティアは4291から4324にかけてこれを彫ったのである。南の壁にはア

ローデンの聖人たちが一列になって歩いている。20人の聖人が運河を見下ろし、彼らの為した聖なる行いの図がその後ろに描かれている。北の壁にはアローデンがとった12種の姿が描かれている。これはアローデンが自分をそれと知らせずに定命の世界を歩くときの姿であり、物乞い、盗人、漁師、獵師、羊飼ひ、農夫、兵士、商人、仕立て屋、職人、芸術家、そして学者の12種である。過去の1世紀の間に個々人が、あるいは集団がこの彫刻の顔を削ったり壊したりしたのだが、それは特に千王戦争の間、そしてスルーン家の台頭以後に集中している。ところが、これらの損傷のほとんどは、不思議なことに時が経つうちに消滅してしまっているのだ。

## レゴ・スクリバ

“書記の地区”は、かつてはシェリアックス帝国の役所仕事を行なう場所であり、紙とインクの製造業者、印刷屋、製本屋、書記官、そして伝令の街であった。現在では、地図製作者以外に残っているこの種の職種のもものは貴重なまでにわずかなものとなっている。商用の倉庫や船に関わる事業（ロープや帆を作る職人、水先案内人、造船工）がここの主要な職業となっている。

**18. タラニクの家：**“<sup>バラリクター</sup>檻の騎士団”は、この地の護衛長官として、“火の日”1回おきごとに12人のヘルナイトを巡回させている。タラニクの家には少なくとも8人のヘルナイトが常駐しており、またウェストクラウン全体には少なくとも15人のヘルナイトが常駐している。自由主義者の哲学者にして学者であるミシアニス・タラニクがこの家を自分の書斎兼書庫として建てたのだが、彼女は“恩寵の道”を奉じるシフ・ケシュのカルトを率いており、4570年代にはそこを通じてウェストクラウン中に白死病を流行らせたのだ。4577年、彼女の家と仕事場は、彼女もろとも火をつけられ、それが彼女のカルトの最後となった。手を下したのはヘルナイトのはしりであるダイディアン・ルールである。タラニクの木版印刷機を発見したルールはこれを使って自分の主張するところの“法的精神”を広めてやろうと考えた。そこからヘルナイトの一派閥となる“檻の騎士団”が生まれたのである。ヘルナイトたちの攻撃で崩れたタラニクの家（この家の名は、表門の礎石に消えないようにしっかりと刻みつけられていたのだ）はその後建て直され、ヘルナイトたちの駐屯地として使われるようになった。もし、街でドッターリの手に残るような暴力沙汰や困った事態が起きた場合、タラニクの家のヘルナイトたちは街の無法状態を鎮めるのを手伝う。そして要に応じてリヴァド砦にも応援を求めるのである。タラニクの家の公的な司令官は**ゴンヴィル・チャード**<sup>バラリクター</sup>**護衛長官**（秩序にして中立、男性の人間のレンジャー7 / ヘルナイト2）であるが、彼の下**の**賄賂好きの武装護衛官（武装士官で、命令系統の中では上から5番目の位置にいる）**アリティル・セヴァーン**<sup>アームズ・マラリクター</sup>（中立にして悪、男性の人間のファイター5）はしばしば賄賂を貰っては市長アルヴァニクシやドロヴェンジ家の意向をチャードの命令として伝えている。

## レゴ・ペナ

“貨幣の地区”ではより儲けの大きい商売が行なわれ、政治的にも金銭的にもどこかうさんくさい立場を取る家々が拠点を置いている。この地区はまた、新興の裕福な商人たちが住んでいる場所でもある。彼らは上手いことやったか運が良かったかし、政治的な立場に固執することなく、貴族たちや帝国宮廷に上手にわたりをつけたのである。

**19 .デルヴヘイヴン**：シェリアックスのパスファインダー・ソサイエティのロッジのうち、スルーン家の台頭以後も唯一おおびらに活動を続けていたものがこれである。この高い壁に囲まれたヴィラは4676ARになぞめいた事件が起こったため見捨てられた。屋敷の門はドッターリによって常に閉じられ鎖をかけられている。そうしてこの屋敷は、謎と噂の帳の奥にうずもれたのである。なぜロッジがこのようなことになったのか、ここを維持していたパスファインダーたちに何が起きたのか、そしてこの屋敷の中にあるはずの異国の宝物はどうなったのか話せるものは誰もいない。しかし、デルヴヘイヴンが潰え去ったことと夜の通りをうろつく影のけだものどもの出現が無関係だと思うものはほとんどいない。

## レゴ・サケロ

“司祭の地区”には、シェリアックスの他の都市のすべてをあわせたよりも多くの神殿と聖職者たちの住まい（現在も使われているものもあれば廃墟と化したものもある）が存在する。何世紀もの間、聖職者たちと貴族たちはみな、アローデナーマの東側の土地を（地上も地下も）アローデン個人の庭としてあけておいたのだ。この土地は、最後の<sup>アスラデン</sup>アローデン司祭の死後、多くの貴族、公権力、そして司祭たちの間で土地をめぐる争いの火種となり、暗殺も多々生じる結果となった。そして4614までには様々な信仰篤きもの、あるいは世俗の家々がこの土のほとんどを買い上げてしまったのである。

**20 .サンクターダ・シンクァーダ**：この6階建ての“五聖人の聖堂”は、アンドール人やシェリアックス人が覚えている前からここに存在する。アローデナーマと同様、この白い大理石の建物は汚されないまま今に至り、数世紀にわたって作りかえられようとしたり、近所の煙突のすすを浴び続けたりしたにもかかわらず、輝かしい姿でここにある。すべての扉の両脇には30フィートの高さの石灰石の石像が、チュラーニ産の緑色岩でできた2層の柱の上に立っている。これはこの聖堂に祀られている5人の聖人、聖人ドターラ、聖人パルモール、聖人リザナ、聖人アデル、そして聖人クルシサル<sup>の</sup>姿を現したものである。

**21 .ヴァネオ・アルヴァニクシ**：市長の館はいつもレゴ・サケロに置かれることになっているが、現在の持ち主はこの建物を著しく増築し、より大きく、そしてより守りやすくしたのである。皆がこれを“アベリアンの放蕩”荘と呼ぶのは、件の市長が彼の屋敷に無限とも見える金を注ぎ込んでいること、そしてその屋敷が誰も真似できないような贅沢な

場合によっては“極悪非道な”とさえいう人もいる。調度を誇っていることによる。この館の主人は都市の有力者たちを招いては、しょっちゅう宴会や舞踏会を開催している。4704年、アルヴァニクシ市長が“ちょっとした楽しみごとのために強力なフィンドを閉

じ込めておくのはなかなか有用だ”と公言したために騒ぎが起きたが、地元民が何を言おうと彼はまったく取り合わなかった。ともあれ“放蕩”荘の地下に閉じ込められているという強力なフィンドに関する噂は、この館が地獄のエネルギーと結びついているという証拠としてささやかれているのである。

**22．アローデンの丘：**聖職者や信仰篤い職人たち、そして数え切れない巡礼たちの手と足が、ふたつの台地部分を持つ大きな丘を作り上げた。丘は周囲の街から200フィートの高さまで隆起している。街の多くの人々はこの丘の頂上の台地を“うつろな玉座”と呼んでいる。シェリアックスのかつての神はけっしてそのふるさとに戻ってこないのだから。より低いほうの台地は教会にかかわる物品や宗教的な像や絵図、そしてウィスクラーニの神殿で作られた様々なものを売り買いする場所になっている。“うつろな玉座”には、神の石像の足元に廃墟と化した聖堂がいくつも、他のかつてのウェストクラウンのアローデン信仰の遺物と共に打ち捨てられている。

**23：ウラルトの道：**アローデンの丘の北側の長い斜面に、聖職者たちは昔、巡礼たちが物理的にも霊的にも丘に近づくようにと階段を刻んだ。ここを登る1段ごとに、アローデンの有翼の目が2つ、ひとつの聖句をはさんだ形で現れる。166段の階段を登りつつ、1段ごとに現れるすべての聖句を声に出して読んだ巡礼たちは、聖人ウラルトの、アローデンに捧げる暁の典礼を朗唱したことになるのである。

**24．アローデナーマ：**アローデンの丘の頂上に、その礎石から90フィートの高さに聳え立つ、巨大な白い大理石から刻みだされたその石像は、アヴィスタンの有史以前、いかなる現存するウェストクラウンの建造物より前からここに立っている。アブサロムの聖職者たちは、12人のアローデンの聖人たちが彼らの祈りと労働と魔法でもってアローデナーマを建てたのだと主張している。アローデンの像は川と島のほうを向き、その胸部は昇りくる陽と沈み行く陽の光を受け止めるようになっている。彼の胸には、銀で彼の紋章である巨大な翼ある眼が描かれており、その両翼はドレーブを描く袖を横切って腕の下まで達している。ウェストクラウンが設立されて以来、様々な神殿や巡礼のための宿、集会用のホールや小さな寺院、はては円形劇場のようなものまでがアローデンの到来を期待しつつ石像の周りに建てられた。その多くはいまや打ち捨てられ、やってくるのは迫害されたり裏切られたりしたものばかりである。人間性の神が失われ、数世紀にわたって放置されたせいで像の足から下肢にかけては汚れてしまったが、アローデナーマは今でもそれを眼にしたものに畏怖の感覚を与える。根性曲がりのウィザードや空飛ぶモンスターなどは言うにおよばず、鳥さえも像の上半身を汚そうとはしないし、また像の胸に輝く銀の眼に傷や曇りが生ずることもないのである。

**25．クァタダ・ネスディディア：**岬の突端を占めるこの四階建ての大聖堂は、ウェストクラウンでも最大のアスモデウス神殿で、アローデナーマの東側ではもっとも高い建物である。ドロヴェンジ家、サリスフェル家、そしてジュリスターク家による、サンクターダ・シンクァーダをアスモデウスの五面の大聖堂に作り変えようという計画が“信仰なき大火”

によって消滅した後、スルーン家、ジェガーラ家、そしてその郎党が資金を出して4639～4677ARの間にこの聖堂を建てたのである。巨大な明り取りの水晶は常に不吉な赤に輝き、夜のウェストクラウンの最大の聖所（あるいは不浄なる場所）として人目を引いている。

**26 . インペリアル・マリーナ**：4641AR、帝国宮廷はヴィラ・ロアルモとその造船場の権利を主張し、この反逆者の土地とドックを押収した。帝国の命令によって川の東端の岬にインペリアル・マリーナが建てられ、4634年には精強なる帝国海軍をウェストクラウンに再建したのである。

### **アローデンの聖人たち**

この川のデルタ地帯は、かつてはアローデンと彼の司祭や助力者たち、特にアローデン信仰における聖人や半神のための聖地として聖別された場所であった。最後のアズランティが死んだ後も、彼の聖人たちは信者たちを助け、かつては存在した信仰がこの街や彼ら自身から完全に失われるのを防ごうとした。アローデン教会の聖人たちはウェストクラウン中に多数の個別あるいは共同の神殿を有しているが、中でももっとも大きく、もっとも保存状態のよいものは、サンクターダ・シンクァーダである。もっとも信仰篤き人々はそれぞれの家や仕事場にある聖人のための厨子を持っており、地下の隠し部屋や、いまや崩れ落ちた神殿の廃墟の中には、少なからぬ数の礼拝堂や祭壇が残されている。ウェストクラウンでもっとも崇敬を集めている6人の聖人を、その人気の順にいかに列挙する。

**聖人ドターラ**：“見守り、待つ者”は護り手の精霊であり、ドッターリの守護者である。

**聖人バルモール**：川と刷新の精霊であり、漁師と小間使いの守護者である。

**聖人リザナ**：深い水底に産するものの精霊であり、真珠とりや貝取りの守護者である。

**聖人アデル**：木工の精霊であり、造船工やボート作りの守護者である。

**聖人クルシサル**：船旅と水先案内の精霊であり、渡舟業者やアデル漕ぎの守護者である。

**聖人ヴァドルス**：結晶と芸術の精霊であり、ガラス職人や芸術家の守護者である。